

ブルガリア語の過去受動分詞と日本語の対照（序章）

川崎 加奈子

An Introduction to Contrastive Analysis Between Bulgarian Past Passive Participles and Japanese

KAWASAKI Kanako

Abstract

This paper is an introduction of discussing the past passive participles in Bulgarian language and the corresponding Japanese expressions. In Bulgarian language, teachers may explain these participles in class as “past” and “passive”. In Japanese language, these meanings are expressed with *rareteiru*, *teiru*, *tearu*, and so on. In such a case, the teacher’s explanation would confuse the learners. Many language teachers who follow the direct method might create the same situation in their teaching. I do appreciate the direct method and would continue to follow it. However, if language teachers hold some contrastive viewpoints between languages, it would be very useful for their teaching. This would thus be beneficial not only for the learners of a language, but also for the improvement of the teachers themselves.

1. はじめに

本稿は、ブルガリア語の過去受動分詞という一形態とそれに対応する日本語を対照する研究の序章である。対照研究と銘打ちながらも、本稿はあくまでも日本語教師の言語分析者としての資質を高めるに寄与することを目的とし、対照研究自体を目的としないことを明言する。

例えば、次のような状況を想定していただきたい。学習者にとって初出のひとつの日本語初級文法項目がある。学習者の母語や媒介語による文法解説書はお粗末なものであり、母語を話す教師もない。日本語のみによる直説法での授業が予定されている。その際、通常、日本語教師は、その文脈を理解しやすい場面設定と、それに必要な例文の選択に腐心するであろう。その例文の選択こそが、その文型の意味の理解を左右すると言っても過言ではないと思う。では、その例文は果たして適切であろうか。日本語から見ると意味や内容が明らかとなる場面や例文でも、ある外国語話者にとっては、既習の文型との違いがわからなかったり、母語に訳しきれず理解不能なままでその日を終わったりすることがあるのではないだろうか。実際にそのような苦い、また後味の悪い経験をしている日本語教師は意外に多いのではないだろうか。

もちろん、その日の消化不良が日本語習得に決定的な打撃を与えるとは限らない。それ以降の学習を積み上げることで克服できる可能性も低くはない。それでも、学習者の母語における表現と日本語の表現の違いが存在するということを日本語教師がはっきりと認知していることによって、提示するべき場面や例文が、より適切に選択できるようになるのではないかと、というのが本稿起稿の端緒である。

日本国内の教育機関での日本語教育においては、学習者の母語が単一であるという状況が極めて少ないことは容易に想像される。そのような中で、ブルガリア語という学習者の母語として極めてマイ

ナーな存在の言語との対照研究が日本語教育研究の立場からは無意味であるという意見があることは否定しない。しかしながら、これまで対照研究されたことのない言語との対照を試みることによって、日本語の新たな特徴を切り出す可能性があるはずである。そして、そのことがいくつもの母語話者が混在する「留学生に対する日本語教育」に示唆を与えることができる一例として、本稿を提示する。

尚、本稿ではブルガリア語を表記する際、記号「/」もしくは改行によって、アルファベット表記と併記する。

2. 問題提起

1. で述べた直接法による授業の混乱状況をとらえやすくするために、逆の状況を想定してみよう。すなわち、日本人がブルガリア語を直接法によって習得しようとしている場合である。

下の表はブルガリア語のみで構成されたブルガリア語初級文法教科書¹からの抜粋である。この教科書を用い、ブルガリア人の教師が、日本人学習者に対して、英語によるキーワードもしくは英語の翻訳を与えることで進められる授業があるとする。この単元での学習項目は「“se/ce” + V (動詞)」の形である。これはブルガリア語においては受身の一つとも捉えられている文型ⁱⁱであるので、教師は「この文型の意味は passive である」と説明するであろう。つまり、「動詞に se/ce を付加することで受身構文になる」という説明になるはずである。

以下、同教科書の同単元においてダイアログとして提示されるブルガリア語の文型と、文脈及び挿絵から導かれる日本語訳を並べてみるⁱⁱⁱ。

(a) ^{vi}	Toi se sybudzda. / Той се събужда.	彼は起きる
(a)'	Maika i ya sybudzda. / Майка й я събужда.	彼女の母は彼女を起こす
(b)	Toi se mie. / Той се мие.	彼は洗う
(c)	Toi se byrshe. / Той се бърше.	彼は拭く
(d)	Tya se reshi. / Тя се реши.	彼女は髪をとかす
(e)	Te se vryshtat. / Те се връщат.	彼らは戻る
(f)	Tya se syblichа. / Тя се съблича.	彼女は脱ぐ
(g)	Toi se oblichа. / Той се облича.	彼は着る
(h)	Tya se obuva. / Тя се обува.	彼女は履く
(i)	Te se hranyat. / Те се хранят.	彼らは食べる

上の日本語だけを見ると、日本語母語話者にとっての「受身」では決してないことは明らかである。かろうじて (a) と (a)' の sybudzda / събужда に se / ce が付くか否かの対比によって、おそらく日本語における自動詞・他動詞の意味にあたと推測できる。

更に、この単元のダイアログの最終文は、(g) 及び (h) の過去受動分詞によって締めくくられる。すなわち、

(g)'(h)'	Te sa oblecheni i obuti. / Те са облечени и обути.
(訳)	彼らは oblecheni / облечени であり obuti / обути である

という一文である。

ここでも、ブルガリア語文法に則れば、教師の説明は「passive」「past」（「受身」「過去」となるが、では、この(g)'はどのような日本語に訳すことができるだろうか。

結論を言えば、この文の一番単純な訳は、「彼らは（今もう）服を着ている（状態である）」である。しかし、「(g)も passive、(g)'も passive」という説明では、日本語母語話者にはこの訳を導くことはできないであろう。

パショフ（1976）による標準的なブルガリア語文法の分類においては、「V（動詞）-n/-н」（-ni/-ни）は主語が複数の場合に用いられる。基本形は-n/-н）の形が「過去受動分詞」であるとされている^v。又、イギリスで出版されたブルガリア語日常会話能力の取得を目的とする自習書「Teach Yourself Bulgarian」では「known as passive participle」（受身分詞として知られている：訳は筆者）とある^{vi}。一方、松永緑彌によるブルガリア語文法の解説書で「完了過去受動形動詞」と命名されている^{vii}。用語の汎用性が低い松永の「完了過去受動形動詞」は理解しにくいだが、この「V（動詞）-n」の意味内容が少し分かってくると、日本語母語話者として最もシンパシーを感じるのは、この「完了過去受動形動詞」である。つまり、この「V-n/-н」は、“過去に完了した動作を受けて今ある状態”を指す表現であり、日本語においては状態を表す「～ている」の意味内容に限りなく近い。また、その語形変化は形容詞と同じである。

また、先述のブルガリア語の文(g)'は、文脈によっては「彼らは服を着せられている（筆者注：状態を表す。動作の継続状態ではない。）」「彼ら（に）は服を着せてある」という日本語にも相当する。しかし、重ねて述べるが、「受身過去」もしくは「passive」「past」というキーワードを手がかりにしてこの文の解釈を引き出すことは、「～である」「～ている」が状態を表すと認識している日本語話者にとっては非常に困難であると言える。

外国語の授業中、学習者の理解が突然フリーズする場面がある。また、日本語教育現場で、母語話者教師から見た“場面を理解するのに適切な例文”が提示されているにもかかわらず学習者が混乱をきたす場面がある。これらはおそらくほとんどの場合、例文や文型の提示などの教授法自体ではなく、この例のように、文型とその表す意味内容が学習言語と既知の言語間において一対一の対応をしていないということによると筆者は考える。つまり、「past」及び「passive」の表す意味内容が、日本語の「過去」及び「受身」とイコールではないための困難である。

翻って、日本語教師は、これと同じような困難な解釈を日本語学習者に強要してはいないだろうか。もちろん、日本語を日本語体系の中で習得していくことの有効性は非常に高く、必要不可欠なものであると考える。その上でなお、日本語教師が授業を進めるに際し日本語だけではなく学習者の母語を分析する観点を持つことで、意味内容の異なる言語間における学習指導をより効果的に行うことができるということの一例を、本稿並びに今後の研究を通して提示できれば幸いである。

3. 本対照研究の意義

では、日本語学習者の中ではごく一部にすぎない限られた学習者の母語と日本語を対照する研究に、意義があるのだろうか。ブルガリア語という世界的に見て広く話されているわけではない言語との対照研究をするに当たって、日本語教育という観点からは、その研究価値に疑問を持たれる向きもあることは十分に予測されるため、敢えてこの点について述べておきたい。

本稿は、「対照研究においては一つの言語の限定された形態の意味特徴を明らかにすることだけを研究目標にしてはならない」という主張に沿って考察を進めるものである。

迫田 (2002) によると、言語の対照研究は二つの言語の違いを明確にすることによってパターン・プラクティスやミニマル・ペアに反映させることから始まったが、学習者の誤用などで母語によらないものも出現するなど問題点が浮かび、期待された成果をあげられず下火になった^{viii}。又、宇佐美 (2002) は言語の対照研究無用論としてその具体例を挙げる。それは、

- ・ 語学習得における母語干渉の事例をあらゆる母語話者にわたって網羅的に調査をすることは不可能である
- ・ 異なる母語話者が現場にいれば無に帰す研究である
- ・ 誤用の原因を母語干渉によるものとするので、それ以外の要因に対する考察が逆に一切抜け落ちてしまう

などである^{ix}。このような批判は、一見、相当に妥当であるように思える。しかし、国研「対照研究と日本語教育」で井上・宇佐美をはじめとする論者たちは以下のように述べる。すなわち、「対照研究の本質的な意義は、言語間の類似と相違に関する情報の提供自体ではない。」「その類似と相違を整理し、結果として、それぞれの表現の意味特徴を分析的にとらえるための観点を発見すること (傍点は筆者)」である。別の言い方をすれば、その意義は、「誤用のパターンを知識として覚えこむことではなく、比較対照して得られる知見をもとにしてさらに広い範囲に応用可能な能力を体得すること (同上)」^xである。つまり、現場の日本語教師が自ら日本語と外国語の対照研究作業をすることによって、言語一般に対する理解力・洞察力をはるかに高められるというのである。

「外国語としての日本語」という認識をもつべきであるということは、日本語教師の“いろは”として常に言われることであるが、言語の対照研究とはまさに「外国語を鏡とすることで、母語話者にとって『あたりまえ』の事柄を『特徴』としてとらえなおす」^{xi} という、「外国語としての日本語」の考え方に立脚するものである。本研究では、二つの言語を対照し、より効果的な授業を行うという目的をもって考察していくが、この言語の対照分析の意義を常に念頭に置いている。そして、自らの観点及び能力を向上させつつ、今後の日本語教授法を工夫するための基礎情報の提供へ繋げるものとした。

4. 研究の焦点

本対照研究は、ブルガリア語の「過去受動分詞」とその意味する内容が等しい日本語に焦点を当て、両語のその形態における意味の重なりと違いを明らかにすることを目標とする。そのことによって、両語のその形態への新たな視点を見出し、ブルガリア語母語話者への日本語学習もしくは日本語母語話者へのブルガリア語学習の指導のヒントとして還元することができれば幸いである。

論述に際しては、「受身」「テンス」「アスペクト」などのカテゴリー立ては必要最小限とする。上述のように、ブルガリア語の「過去受動分詞」は単に日本語の「受身」もしくは「受動態」の比較では日ブ両語の意味内容をとらえることはできないと考えるからである。カテゴリー立てが必要か否かは、実際に日本語を指導する場合に必要なか否かという視点から結論づけられるものとする。上記 (g)

及び(h)'に現れる動詞を元にした状態性の表現は、日本語の「～テイル」「～テアル」「～ラレテイル」の表現に相当することが容易に想定されるが、それらの表現は同時に自動詞・他動詞の対応をはじめ、それらと相関関係にある可能形・使役形・受動態・能動態の考察と切り離せない。ブルガリア語においても(a)～(i)の例のように、「V-n/-H」の派生する元の「se/ce + V」と「V」の対比は自動詞・他動詞の意味を生じてくる。それら多岐にわたる分析課題が生ずる可能性は念頭に置きながらも、ブルガリア語の「過去受動分詞」という一形態を基準とすることで、日本語の焦点も絞ることが可能となると考える。

また、稿末参考文献に挙げた各種ブルガリア語学習書においても「過去受動分詞」はあまり重視されていない形態である。ブルガリア語は動詞のテンス・アスペクト体系が非常に複雑で様々な論が長年展開されているというが、その影に隠れてであろうかあまり論じられない「過去受動分詞」も、日本語を鏡とすることで新しい視点を提示しようとする。一日本語教師が、多くの日本人そして自分自身もあまりよく知らないブルガリア語という外国語との対照研究をする意味もそこにあると確信している。

5. ブルガリア語「過去受動分詞」の考察

1) ブルガリア語「過去受動分詞」の意味

過去受動分詞で表されるブルガリア語の文は、前述の、例えば、

Te sa oblecheni i obuti. / Te sa obleчени и обути.

彼らは 服を着て、靴を履いている

などがあるが、先に述べたように、その日本語訳から日本語話者にとっては「過去受動」という名称は発想しにくい。本章では、まず過去受動分詞の分析を行うことで、対応する日本語との対照に繋がりたい。

パショフ(1994)によれば、ブルガリア語の過去受動分詞は、“対象(主題)”への完了した行為の結果を意味するものであり、その“対象”の性質として表現される。その行為は“対象”によってなされるのではなく、他者によってなされる行為であるから、能動ではなく「受動」と規定される。また、“行為の結果”を意味するのであるから、その行為はその時点より以前に完了していることは明白である。それ故、この分詞を「過去受動分詞」と規定できるとしている。

そして、過去受動分詞は行為を受けたものであるから受動態の中でしか現れない形であり、この形に言い換えられるか否かで受動態であるかどうかの判定ができるとする^{xii}。

2) 過去受動分詞の語形

ブルガリア語の過去受動分詞は、文中においては、英語のbe動詞に近い働きをする sym/сьм(一人称単数)、si/си(二人称単数)、e/e(三人称単数)、sa/ca(複数)(※本稿では仮に補助動詞と呼ぶ)と共に用いられ、その語形は、動詞の過去完了時制の一人称単数形の語幹に「-n/-H」もしくは「-t/-T」が付くことで形成される。ブルガリア語の動詞は活用の仕方によって以下のI～IIIの3種類に分類さ

れ、そこから過去受動分詞の語形が決まる。他の品詞、特に意味も語形も似ている形容詞と見分ける際に必要となるので、整理しておく。

ブルガリア語過去受動分詞の語形成

活用	過去受動分詞の語尾	現在時制 一人称単数形	過去完了時制 一人称単数形	過去受動分詞 (男性単数形)
I	-t/-т	-na/-на (例) bryсна/брьсна 髭を剃る	-nah/-нах brysnah/брьснах	-nat/-нат brysnat/брьснат
		- (母音) ya/-я (例) izpiya/изпия 飲み干す	- (母音) h/-х izpih/изпих	- (母音) t/-т izpit/изпит
	-t/-т, -n/-н 両方ある	※ -eya/ея (例) poleya/поля 注ぐ	-yah/-ях polyah/полях	-yat/-ят, -yan/-ян polyat/полят, polyan/полян
	-n/-н	上記以外全て ※但し、過去完了で oh/ох, koh/кох になるものは、en/ен, chen/чен となる		
	(例) cheta /чета 読む izpecha /изпеча 焼く	-oh/-ох (例) chetoh/четох -koh/кох (例) izpekoh/изпекох	-en/-ен (例) cheten/четен -chen/-чен (例) izpechen/изпечен	
II	-n/-н	-a/-а, -ya/-я (例) molya/моля 頼む	-ih/-их molih/молих	-en/-ен molen/молен
III	-n/-н	-am/-ам, -yam/-ям vzemat/vземам, zatvoryam/затворям	-ah/-ах, -ah/-ах vzemat/vземах, zatvoryah/затворях	-an/-ан-, yan/-ян vzemat/vземан zatvoryan/затворян

I 活用：二人称単数形の活用語尾が「-esh/еш」の動詞、II 活用：同左活用語尾が「-ish/иш」の動詞、III 活用：同左活用語尾が「-ash/аш」もしくは「-yash/яш」の動詞

尚、男性単数形の「-n/-н」「-t/-т」の語尾は、更に主語の性と数によって以下のように変化する。

ブルガリア語過去受動分詞の語変化

	男性単数	女性単数	中性単数	複 数
語尾が n/н	-n/-н	-na/-на	-no/-но	-ni/-ни
語尾が t/т	-t/-т	-ta/-та	-to/-то	-ti/-ти

3) ブルガリア語の態

① 過去受動分詞の形式による態

ブルガリア語の態は能動態と受動態があり、動作及びその動作の行為者と受け手の関係により成り立つ概念である。

(例) Ivan me pokani. / Йван ме покани. (能動態)

イワンは 私を 招待した

⇔ Pokanen sym ot Ivan. / Поканен съм от Йван. (受動態)

私は 招待された イワンに

行為者を明言したくないとき、明言できないとき、行為者があまり重要でないときなどに使われる形で、謙虚・丁寧・尊敬のなどを婉曲に表現する際にも使われる。これらは日本語とも多くの部分で共通しており、お互いの語学学習者にとってはわかりやすい概念であると言える。

② 無人称の態

過去受動分詞と併せて議論される形態に、「無人称の態」と「se/ce + 動詞」の二つがある。この二つの形態のカテゴリー付けは本稿の主旨ではないが、過去受動分詞の概念を把握する上で、この二つの形態の意味を把握することが大きなヒントになると考えられる。

Nyakoi e otvaryl vratata i e vlizal v stayata. / Някой е отварял вратата и е влизал в стаята.

だれかが 開けた ドアを そして 入った 部屋に

を受身にした場合の

Vratata e otvaryana i v stayata e vlizano. / Вратата е отваряна и в стаята е влизано.

ドアが 開けられている そして 部屋に 入られている

の後半が無人称の態と言われることがある。日本語の単語の訳を繋げて解釈すると、「部屋の所有者が入られた」もしくは「部屋が入られた(破られた)」と取れるので不自然ではないように思える。しかし、ブルガリア語では、部屋「へ」という動作の方向を表す前置詞 *v*/*в* がついている。更に、「入る」の過去受動分詞が、人の性も「vratata/vratarata ドア」(女性名詞)の性も受けず中性になっていることから、入られた主体つまり「入る」行為を受ける対象がないことが明らかである。これを日本語に意識するとすれば、「ドアが開けられ、だれかが部屋に入った形跡があった」となるであろうか。他にも、

Tuk e pusheno. / Тук е пушено.

ここで 吸われた (意識→ここでだれかが吸ったようだ)

などがある。tuk/тык は場所を表す副詞であり、動作主も動作の受け手も文中に現れない。日本語にはない形態と言える。

③ 「se/ce + V」文と過去受動分詞文との比較

パシヨフ (1994) では過去受動分詞の文と「se/ce + V」が並べて説明されている^{xiii}。

(j) Tazi kniga mnogo se tyrsi naposledyk. / Тази книга много се търси напоследък.

この本は とても 求められる 最近 (意識→この本は最近よく売れている)

(k) Tazi kniga e mnogo tyrsena naposledyk. / Тази книга е много търсена напоследък.

この本は とても 求められる 最近

(j)が「se/ce + V」であり(k)が過去受動分詞の文である。日本語訳が同じであることからわかるように、(j)(k)は互いに言い換えられるとされている。(k)の文に現れる tyrsena/търсенаは tyrsya/тырша (探す)の過去受動分詞であり、(j)の「se/ce + V」も受動態以外の態ではありえない過去受動分詞の文と言い換えられる以上、受動態と認定できるとしている。

では、次の例はどうだろうか。

(l) As obicham. / Аз обичам. 私は 愛している

に、「se/ce」を加えた

(m) As se obicham. / Аз се обичам.

この文には、二つの意味があると言われる。すなわち、

= (n) As cym obichan ot vsichki. / Аз съм обичан от всички.

私は 愛されている から みんな

= (o) As obicham sebe si. / Аз обичам себе си.

私は 愛している 自分自身を

つまり、「se/ce + V」は必ずしも過去受動分詞を用いた受動態に言い換えられるわけではなく、「se/ce」が主語自身の代名詞の役割をし、主語が行為者でもあり同時に受け手でもある場合があるのである。(n)と(o)は意味が全く異なる。(o)に言い換えられる場合のse/ceを「再帰の態」とする説もあるとパシヨフは紹介する。

その他、「se/ce + 動詞」の意味として、「相互」をパシヨフは挙げる。これは主語が複数の場合によく現れる用法である。

(p) Detsata se biyat. / Децата се бият.

子どもたちは 自分たちを 殴った。 (意識→子どもたちは殴り合った)

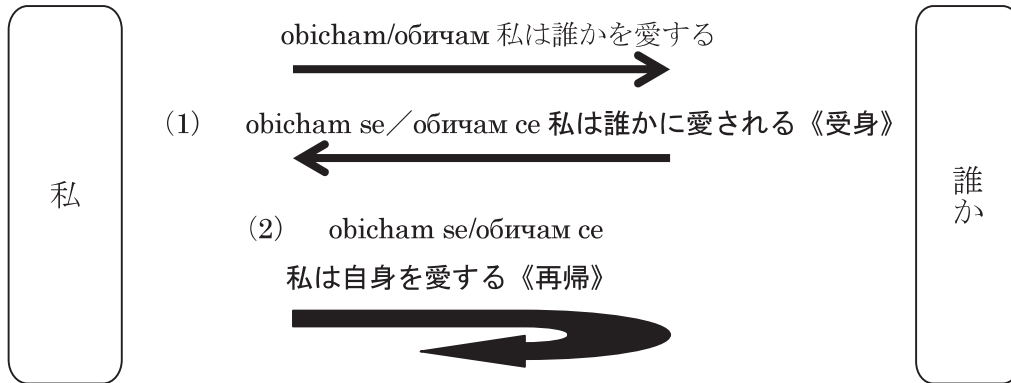
主語である Detsata/Децата (子どもたち)は(o)と同じく行為者でもあり受け手でもある。しかし、

具体的な行為は Detsata/Дети (子どもたち) という集団の構成分子の一つである子供 A が同じく構成分子の子供 B を殴り、子供 B は子供 A を殴るということを表す。これを、主語の内部における「相互」の関係であるという。また、日本語母語話者の視点から「se/ce + 動詞」を見ると、寺島が語学学習書に挙げているように vryshtam/врыщам 返す - vryshtam se/врыщам se 帰る など、自動詞と他動詞の対応を作ると考えることもできる。

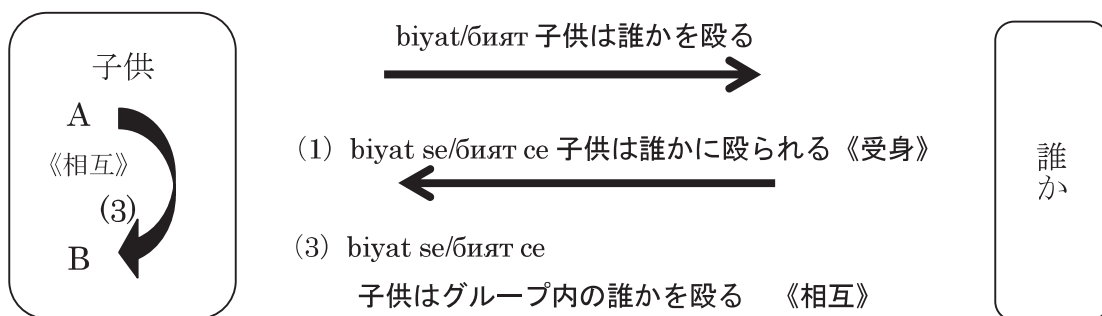
これら再帰、相互、自他動詞の意味がカテゴリーと認定できるか否かは本稿の趣旨ではないので検証しないが、以上の例文を概観すると、「se/ce」の文の共通の意味が見えてきそうである。すなわち、上記の例文のいずれも、「se/ce」によって動詞の行為のベクトルが 180 度転換していると言える。

動詞の行為のベクトルを図にすると、下のようになる。転換の種類には、矢印全体が転換する場合(1)と、Uターンを描いて転換する場合(2)の2種類があり、それによって動作主が他者なのか自身なのかが変わる。又、主語の単複などの性質によって、受身や再帰や相互などの意味の違いも生じるが、「se/ce」の働きが行為の方向の 180 度の転換であることは少なくともこれらの例では共通している。

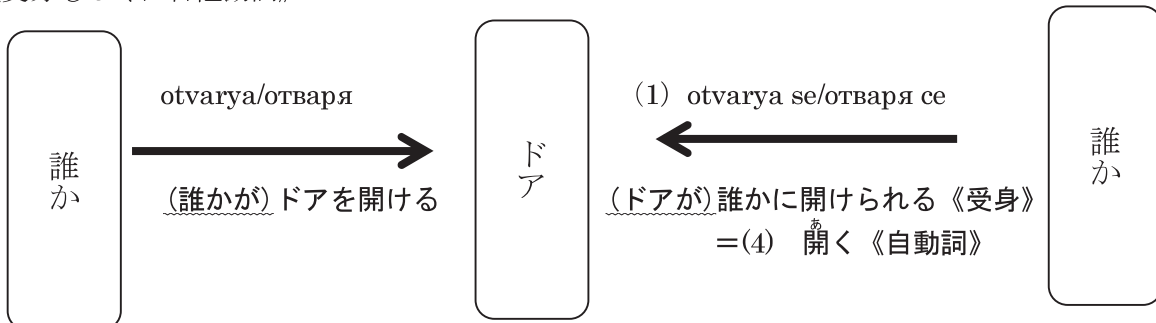
《受身もしくは再帰》



《受身もしくは相互》



《受身もしくは自他動詞》



以上を勘案すると、結果状態を表す過去受動分詞の文と、動詞のベクトルが転換することを表す「se/ce」の文は、100%のイコールで結ぶことはできないのではないだろうか。文法書等でもよくイコール(=)の記号を使って並立してある過去受動分詞の文と「se/ce + 動詞」の文が、数学的なイコールではないことに注意が必要であると筆者は考える。語彙や文の形態といった表現方法が異なる以上、そこには必ず意味の違いが存在するはずである。

では、ベクトルが一方向で逆転した場合だけが過去受動分詞文に変換でき(すなわち受動態となり)、Uターンした場合が再帰であるかということ、そうでもない。次の例を見よう。

Obleka se. / Облека се.

私は(だれかに)着せられる [《受身》矢印は(1)の全体の方向転換]

または 私は自分に着せる (=着る) [《再帰》(2)のUターンの方向転換]

この「se/ce + 動詞」文の結果状態を表す過去受動分詞の文が、

→ Oblechen съм./ Облечен съм.

私は(だれかに)着せられた/私は服を(自分で)着た

となるように、過去受動分詞文でも受身と再帰のどちらの意味も表すことができる場合がある。ここから、過去受動分詞文は受身の意味だけではなく多義的であると言える。

もちろん、「se/ce + V」文と過去受動分詞文の表すところは100%同じではない。「se/ce + V」文は動詞そのものを用いる以上、動作に重きをおいた文であり、過去受動分詞文は、se/ceによって受けた動作の結果状態を表すものであることは断定してよいであろう。言い換えると、動作そのものの継続・進行の表現は「se/ce + V」文が担っているはずであり、結果状態の表現は過去受動分詞文が担っているはずである。そして、その「結果状態」というところに、時制とアスペクトを考察する必要性が生じるのである。

4) ブルガリア語の時制

ブルガリア語の時制は、日本語と比べるとかなり複雑であると言われる。ブルガリア語の時制については数々の論議があるが、ここでは深入りを避け、パシヨフとアンドレイツィン(1990)の分類・用語・例文を使用して、過去受動分詞と日本語の考察に焦点を絞る。尚、時制の呼び名は両氏が共通して用いているものを筆者が日本語に直訳したものである。

以下は、各時制において、se/ceによって受けた動作を表す文と、その結果を表し意味的にse/ceの文とほぼ同じとされる過去受動分詞の文を並立させたものである。

① 《現在時制》

Tazi kniga mnogo se chete. / Тази книга много се чете.

この本はたくさん読まれる/読まれている

— (その結果状態) → Tazi kniga e mnogo chetena. / Тази книга е много четена.

② 《過去不定》＝過去のいつの時点か不明であるが、行われた（と思われる）動作を表す

Protokolyt se e chel veche. / Протоколыт се е чел вече.

資料は 読まれた（読まれていた）既に

—（その結果状態）→ Protokolyt e cheten veche. / Протоколыт е четен вече.

この、日本語では明らかに異なる①と②が、過去受動分詞文ではどちらも「e/e」という現在を表す補助動詞で表されている点にまず注目したい。

③ 《過去完了》＝過去における完了していない、もしくは繰り返し行われる動作を表す

Tazi kniga se cheteshe ot vsichki. / Тази книга се четеше от всички.

この 本は 読まれていた（読まれた）みんなに

—（その結果状態）→ Tazi kniga beshe mnogo chetena ot vsichki. /

Тази книга беше много четена от всички.

④ 《過去完了》＝過去における完了した動作を表す

Tazi kniga se chete ot vsichki. / Тази книга се чете от всички.

この 本は 読まれた（読まれていた）みんなに

—（その結果状態）→ Tazi kniga beshe chetena ot vsichki. /

Тази книга беше четена от всички.

⑤ 《過去事前》＝過去のある時点において、それよりも以前に行われた（と思われる）動作を表す

Protokolyt be se chel oshte predi tova. / Протоколыт бе се чел още преди това.

資料は 読まれた（読まれていた）前に その

—（その結果状態）→ Protokolyt beshe cheten oshte predi tova.

Протоколыт беше четен още преди това.

この③④⑤の文は日本語だけ見ると「～られた」「～られていた」と、ほとんど同様であり、過去受動分詞の形も過去を表す「beshe / беше + 過去受動分詞」と、同じである。しかし、日本語での意味を考えるに際しその状態の発生した se/ce の文をベースに考えると、「読まれた」「読まれていた」（もしくは「読んであった」）のうちに幾分かの優先順位がつけられるのではないだろうか。つまり、②では「読まれた」の方がよりふさわしく、③では「読まれていた」の方が適切である。

同様に、以下のとおり、⑥《未来》と⑦《未来事前》、⑧《過去未来》と⑨《過去未来事前》の異なる時制の se/ce の文が、それぞれ「shte byde/ще бъде + 過去受動分詞」「shteshe da byde/щеше да бъде + 過去受動分詞」の形に統合される。

⑥ 《未来》

Protokolyt shte se chete dnes. / Протоколыт ще се чете днес.

資料は 今日 読まれる（だろう）

—（その結果状態）→ Protokolyt shte byde cheten dnes. / Протоколыт ще бъде четен днес.

⑦ 《未来事前》 = 未来のある時点以前に行われる動作を表す

Protokolyt shte se e chel ot vsichki. / Протоколыт ще се е чел от всички.

資料は 読まれている (だろう)

— (その結果状態) → Protokolyt shte byde cheten ot vsichki.

Протоколыт ще бъде четен от всички.

⑧ 《過去未来》 = 過去における未来の動作を表す

Protokolyt shteshe ga se chete vchera. / Протоколыт щеше да се чете вчера.

資料は 読まれていたはず (読まれるはず) だった 昨日

— (その結果状態) → Protokolyt shteshe da byde cheten vchera.

Протоколыт щеше да бъде четен вчера.

⑨ 《過去未来事前》 = 過去のある時点以後に起こる動作の前に行われる動作を現す

Protokolyt shteshe da se e chel ot vsichki. / Протоколыт щеше да се е чел от всички.

資料は 読まれている (だろう)

— (の結果状態) → Protokolyt shteshe da byde cheten ot vsichki.

Протоколыт щеше да бъде четен от всички.

つまり、過去受動分詞文は時間的意味においても多義的であると言える。その多義性を解きほぐすヒントは、その状態をもたらした se/ce + 動詞の動作を見ることにあるはずである。そしてそれは、対照分析によって日本語自体の「ている」「である」「られる」などの考察のヒントにまで繋がっていくのではないだろうか。

5) ブルガリア語のアスペクト

さて、4) の③、④の文を比べると、日本語の「読んだ」に相当するブルガリア語が chete/чете と cheteshe/четеше の2通りあることがわかる。ブルガリア語の動詞は、多くのものが下表のように継続的あるいは時間がはっきりしない動きを表す「不完了体」と、一回だけの動きを表す「完了体」を持つ。

ブルガリア語動詞の不完了体・完了体

日本語の意味	不完了体	完了体
【取る】	vzemat/вземам	vzema/взема
【与える】	davam/давам	dam/дам

これにより、③④に現れたように、過去受動分詞文においては同じ形態でありながら「読まれた」のか「読まれていた」のか(場合によっては「読んであった」のか)という日本語の違いが生じることがある。

更に、日本語においても多く研究されている動詞自体の持つアスペクトをブルガリア語の動詞においても考察することが、過去受動分詞の多義性故に、より必要となると考えられる。

6. 終わりに

以上、本研究の目的とブルガリア語過去受動分詞に関する概観をまとめた。もちろんこれは序章にすぎず本論はこれからである。上述のように、過去受動分詞の意味内容は、非常に多義的である。そして、その多義的形態は、日本語の「ラレテイル」「テイル」「テアル」という多義的な形態と一部が複雑に重なっている。今後、当該ブルガリア語表現に相当するこれら日本語の形態との比較を具体的に進め、両語のそれぞれの形態における意味特徴を分析していく。そして、それらの分析により日本語の新たな特徴を切りだしていくことができれば、そのことが日本語教育のための効果的な例文選択をするヒントとなり、ひいては効果的な指導法やシラバスまでも提示する示唆となりうると確信している。

《註》

- i Юлиа Ницолава Антонова 他：『Български Език България и българите』, Наука и изкуство 1990
- ii 動詞の前もしくは後ろに付く「se / ce」は再帰動詞として働く場合と分類される場合もある。これらの分類の詳細は第2章で詳述する。
- iii 主語・目的語の有無によって se / ce が si / си に変わる場合や語順が変わる場合もあるが、ここでは問題点のみを明らかにするために文を単純化した。
- iv 表の (a)～(h) の記号は筆者による。
- v Петър Пашов：『Практическа българска граматика』, София: Просвета 1994, p.183
- vi Michael Holman & Mira Kovatcheva：『Teach Yourself Languages – Bulgarian』, Hodder Headline, 1993/2003, p.146
- vii 松永緑彌：『ブルガリア語文法』大学書林 平成3、p.118
- viii 迫田久美子：『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク 2002 p.19-23
- ix 国立国語研究所：『日本語と外国語の対照研究X 対照研究と日本語教育』くろしお出版 2002、p.82
- x 同上 (井上) p.6
- xi 同上 (井上) p.17
- xii Петър Пашов：『Практическа българска граматика』, София: Просвета 1994, p.185
- xiii Петър Пашов：『Практическа българска граматика』, София: Просвета 1994, p.168-169

《参考文献》

- 石綿敏夫・高田誠著：『対照言語学』おうふう 1990/2005
- 井上優：『日本語文法 1 巻 1 号 日本語研究と対照研究』くろしお出版 2001.9
- 生越直樹編：『シリーズ対照言語学 4 対照言語学』2002 東京大学出版会
- 影山太郎：『日英語対照研究シリーズ 動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版 1996
- キリルラデフ、鎌田修：『京都外国語大学研究論叢 58 「日本語の『概言』について」』2001
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子：『時・否定と取り立て』岩波書店 2000/2001
- 工藤真由美：『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房 1995/2002
- 国立国語研究所：『日本語と外国語との対照研究IV 『日本語と朝鮮語』』くろしお出版 1997
- 国立国語研究所：『日本語と外国語の対照研究V 『日本語とスペイン語(2)』』くろしお出版 1997
- 国立国語研究所：『日本語と外国語の対照研究VI 『日本語とスペイン語(3)』』くろしお出版 2000
- 国立国語研究所：『日本語と外国語の対照研究X 対照研究と日本語教育』くろしお出版 2002
- 国立国語研究所：『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版 1985/1991
- 小島義郎：『日本語の意味・英語の意味』南雲堂 1988

- 迫田久美子：「日本語教育に生かす第二言語習得研究」アルク 2002
- 塩田洋子：「エクスプレス スペイン語」白水社 1987
- 須賀一好・早津恵美子編：「日本語研究資料集 動詞の自他」ひつじ書房 1995
- 寺島憲治：「エクスプレス ブルガリア語」白水社 1990/2005
- 寺村秀夫編：「講座日本語学 10 外国語との対照Ⅰ」明治書院 1982/1991
- 寺村秀夫編：「講座日本語学 11 外国語との対照Ⅱ」明治書院 1982/1992
- 寺村秀夫編：「講座日本語学 12 外国語との対照Ⅲ」明治書院 1982/1991
- 寺村秀夫：「日本語のシンタクスと意味Ⅰ」くろしお出版 1982/1987
- 寺村秀夫：「日本語のシンタクスと意味Ⅱ」くろしお出版 1984/2003
- 中右実編／鷲尾龍一・三原健一著：「日英語比較選書⑦ヴォイスとアスペクト」研究社出版 1997
- 仁田義雄編：「日本語のヴォイスと他動性」くろしお出版 1991/1993
- バーナード・コムリー著 山田小枝訳：「アスペクト」むぎ書房 1988 (原書は 1975/1980)
- 二枝美津子：「主語と動詞の諸相」ひつじ書房 2007
- 町田健：「日本語の時制とアスペクト」アルク 1989
- 益岡隆志：「命題の文法」くろしお出版 1987/1995
- 松永緑彌：「ブルガリア語文法」大学書林 平成 3
- 水谷静夫編：「朝倉日本語新講座 3 文法と意味」朝倉書店 1983/1991
- 山中桂一：「日本語のかたち 対照言語学からのアプローチ」東京大学出版会 1998
- ヨフコバ四位エレオノラ：「ブルガリア語の 1 (エル) 分詞の語用論的研究」東京大学大学院未公開博士論文 2003
- V. Comrie : Aspect , Cambridge University Press, Cambridge, 1976,
- Петър Пашов : Практическа българска граматика , София:Просвета 1994 p.168-169
- Michael Holman & Mira Kovatcheva : Teach Yourself Languages – Bulgarian, Hodder Headline, 1993/2003
- Петър Пашов : Практическа българска граматика , София:Просвета 1994
- Петър Пашов, Руселина Ницолова(съставители) :
- Помагало по българска орфология. Глагол , София, Наука и изкуство 1976
- Милка Стоянова Емил Стоянов : Учебник по български език за чужденци, София, 1993
- Тодор Бояджиев, Иван Куцаров, Йордан Пенчев. Съвременен български език. 1998. София: Петър Берон.
- Юлия Ницолова Антонова 他 : Български Език България и българите, Наука и изкуство 1990